「ウェディング・プロデュース」
－デザインの学びを取り入れた授業実践－

増 田 榮 美
MASUDA Emi

キーワード：デザインの学び、表現・構想・具現化、グループワーク

１．はじめに

2022年度より、本学においてデザイン思考を取り入れた「デザインの学び」をカリキュラムに加えている。そこで美術やデザインを専門とする学生を対象にするのではなく、ブライダル分野とデザインの学びを結び付けた授業を行うことになった。

見た目に特別な意匠はないが、人間や社会のプロセスによい変化をもたらす提案がデザインの成功例と目されるようになり、米・カリフォルニア州に本社を置く、IDEO（アイディオ）社による成功例のように、アウトプットを生み出す実践を「デザイン思考（Design Thinking)」と呼んでおり、人間（ユーザ）側からイノベーションを実現する手法として注目を集めてきた(岡、田村、堀井 2009)。橋本はデザイン思考について、「米国のIDEO社の理念であるデザイン主導のイノベーションへのアプローチが元になっており、人間中心を原則としたイノベーションのための問題解決プロセス」であると説明している（橋本 2014)。

本学では、2022年度より「デザインの学び」という教育プログラムを取り入れている。これは、本学の多様な教育プログラムに対して、学生たちが「表現する」力を身に付けるための仕組みで、アート思考と技法、デザイン思考とその技法を組み込んでいる。

三菱みらい育成財団2023年度の助成事業において、本学の「『デザインの学び』の開発：今日の大学教育の中心をなす「知る」学びと芸術やデザイン分野で培われた『行う（表現する)』学びを編み合わせる営み」が採択された。「『知る』学びを中心とする今日の大学教育に『行う』学びを復権し、両者を編み合わせる新たな教育プログラムの構築を目指す」としている（三菱みらい育成財団ホームページ)。行う学びとは、学び手が関心の対象を自分で見える化・具体化・身体化する（行う）力、つまり人が本来もつ「表現する」力を取り戻すことである、という。そして、この表現する（行う）力と説明する（知る）力を編み合わせる教育が「デザインの学び」である。「知る・行う」を編み合わせる学びから、自分たちの社会を自分たちで「表現し・構想し・具現化（実践化）する」人材の育成が期待できる。

「ウェディング・プロデュースⅠ」は２年次前期の演習科目で、２年次後期科目「ウェディン

グ・プロデュースⅡ」において実施する模擬結婚式をグループワークにて企画し、プレゼンテーションを行う授業である。デザインの学びを取り入れた「ブライダルコーディネート」と連携し、学び手が関心の対象を自分で見える化・具体化・身体化する（行う）力、つまり表現する力を身に付け、さらに説明力を編み合わせることでブライダルの知識の深化を期待することができる。その結果、これまでにない、オリジナリティのある結婚式が企画できるのではないかと考えている。

また、パワーポイントを使用せずプレゼンテーションを実施させることで自分たちらしい表現方法の発見につながり、発案した企画の見える化が可能となるだけでなく、自分たちの企画内容に自信を持って発表することができるようになり、発表態度に好影響を及ぼすことが期待できる。

美術を専門としていない学生たちが、デザインの学びを取り入れ、デジタル機器を使用しないプレゼンテーションを実施することでどのような学修成果を得られるか、今後の授業運営を考える上で検証が必要であろう。

授業の内容に対する評価は、学生の学修成果を分析することで得られる。具体的には、「ウェディング・プロデュース」の授業内で提出したワークシートや実施する結婚式企画のプレゼンテーションに対する審査員評価から、学修成果を獲得できているかどうかを検証する。また、プレゼンテーション方法が変わった今年度の評価と昨年度を比較して違いを分析する。

独断と偏見を避けるため、研究者である授業担当者のみならず、担当者以外の審査員と学生間の評価を分析する。学外から婚礼業務実務者として２名のブライダルコーディネーターと地域の婚活支援に関わる方に、また、学内からデザインを専門としない教員に審査員を依頼する。

学生が、パワーポイントを使用せず手作りのツールやアイテムを用いたプレゼンテーションに対して、「テーマ・コンセプトがしっかりしていてツールやアイテム、演出内容との意味づけが明確」、「内容がわかりやすい」、「発表態度が優れている」、という評価が得られれば授業効果が得られたことになる。

一方で、「手書きの発表ツールがわかりにくい」、「結婚式のイメージができない」、「発表態度が良くない」、という結果であれば、効果が認められないことになり、次年度以降の授業内容の再構築が必須である。

徳田はデザイン思考に基づく授業の考察において、「受講生に『ひらめきを計画的に生み出すための発想法』を身につけさせることを目指す教授法の開発を企図している。」としている（徳田 2014）。しかし、本学におけるデザインの学びを応用することを考えると、ひらめきを計画的に生み出すための発想法を身に付けることよりも、座学で得られた専門的知識（知る）と、表現する（行う）力を編み合わせ、実社会でも活かせる「表現し・構想し・具現化する」人材育成を目指したい。

ブライダル関連科目におけるデザインの学びは、まだ試みの段階であることから、この大きな目標に対して実践の成果は限定的である。また、結婚式を提案する対象が存在しないため、昨今の結婚式を調査してニーズを探り、想像の中でのカップルに対して提案することになる。

したがって、本稿では、本学における「デザインの学び」の考え方に基づき、学生の観察記録の中から得られた考察を紹介し、分析を施しておきたいと考える。

なお、学生の成果物を示すにあたり研究倫理審査会に申請して許可を得（承認番号2023-2）、個人が特定されないよう配慮して掲載するものとする。

２．授業について

2-1. プロジェクト型授業「ウェディング・セレモニー」の概要

平成20年度から、ブライダルフィールドで学ぶ学生を対象としたプロジェクト型の授業「ウェディング・セレモニーⅠ」を２年次前期、「ウェディング・セレモニーⅡ」を後期に開講している。１年次から座学で学んできた結婚式についてのノウハウを活かしてプランニングをし、それを具現化する授業で、具体的には、ブライダル学修の集大成として学生たちが企画した模擬挙式・披露宴（以下　模擬結婚式）を実際に婚礼会場で実演するというものである。卒業を目前にした時期に実施することもありブライダル分野の卒業制作という位置づけにもなっている。

前後期合わせて30回の授業で企画から実演までを行う。具体的には、２年次前期15回で、授業概要説明とプランニングについての講義、グループワークにて結婚式を企画、審査員を招聘して実施されるプレゼンテーションに向けて準備と練習を行い、プレゼンテーションの結果で実施する結婚式のテーマを決定する。

テーマ決定を受けて、２年次後期15回で、模擬結婚式のスケジュールや配役、演出、衣装を決定する。ブライダルコーディネーター役をはじめバンケットマネージャーや音響・照明、新郎新婦などさまざまな役割を全て受講生で分担する。配役後は役割に応じて準備を行い、13回目に結婚式会場での打ち合わせ、14回目の授業時にリハーサルを実施、その後、15回目の授業時間に会場準備、授業時間外の１日を使ってアウトキャンパスにて結婚式を実演する。

2-2. 授業のねらい

この授業では、実際に結婚式場において実施する結婚式を具体的に企画することが求められる。実践的な学びを実現することで、学生がより高度な知識や技能を身に付けることができる。授業では現実の具体性があるテーマを扱うことで、実践的な学びを促し、学生の問題解決能力や実践力を高めることが期待される。

プレゼンテーションに向けてのグループワークやチームワークを通じて、協働的な学びを促し、コミュニケーション能力やリーダーシップ能力の向上にもつながると考えられる。

グループワークの中で、より良い結婚式にするため自主的に課題を発見し、解決策を模索することを促すことで自主性を育む効果も得られる。

授業で期待される効果をより高めるために、本学における「デザインの学び」を取り入れた授業「ブライダルコーディネート」との連携を図り、表現する力と説明する力を編み合わせ、学生が自らの考えを組み立て、まとめ、表現することを促す。アイデアを想像し、具体化する

ために必要な手順のフレームワークとして、デザインの学びを取入れることで、自分の考えをまとめ、アイデアを形にする場面において活用することが可能になる。

表現することを重視するため、プレゼンテーションではパワーポイントの使用を禁止した。パワーポイントでプレゼンテーションする場合、既存の写真やイラストを使用するケースが多くなる。写真が存在するということは、新しいアイデアではなく、これまでに実施されているアイデアであるといえる。デザインの学びの目的を達成するには、結婚式において行われる行為や演出の意味を知り、その上でそれを表現するためにはどうすれば良いか深く考え、それを手作りの発表ツールで表現することが必要と考えた。

2-3. 授業計画

デザインの学びの考え方を身に付けるため、実践形式の授業とし、以下の点に留意することにした。

①グループワークを中心として、共同作業の中で意見や知恵を出し合うこと。他者の意見やアイデアを認識し、多数のアイデアを集約するプロセスを学ぶ。

②対象となるカップルは存在しないが、どのようなニーズに応えるのか、どのようなカップルを対象とするのかを基準に、実現可能な結婚式を企画することで学修のモチベーションを高める。

③グループの成果をプレゼンテーションする。成果をまとめること、話し合いを記録すること、表現力・説得力の重要性を学ぶ。

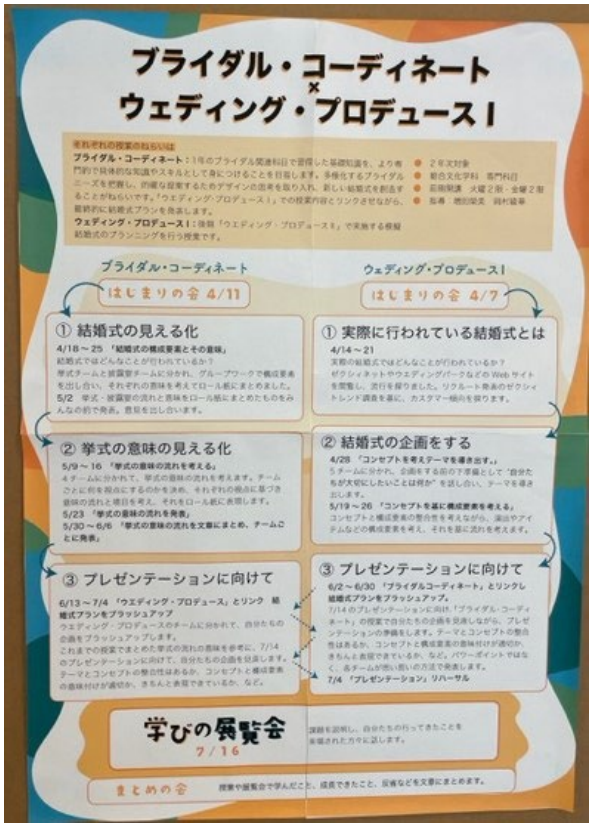

図１　学びの展覧会における授業概要をまとめたポスター

デザインの学びの考え方については、「ウェディング・セレモニーⅠ」と平行して開講されている「ブライダルコーディネート」で身に付ける。１年次の座学で学んだ知識を基に、結婚式における演出や行為、流れについて話し合い、それを表現、いわゆる見える化することで知識の定着を図る。これまで上辺だけの知識だったものが、見える化したことで深く意味を考えることにつながり、結婚式のアイデアを創出する際の土台となる。

デザインの学びを通して、結婚式について深く考え、自らのアイデアを表現することを学び、それを結婚式のプロデュースに活かしていく。

具体的には以下の通りに授業を進めることにした。授業は全15回、１回あたり90分で構成されている。

第１回　「イントロダクション」　授業の進め方の説明
第２回　「発表へのモチベーションを上げる」　参考に過年度のプレゼンテーションを見る。プレゼンテーションに向けてグループを作る。
第３回　「結婚式事情を探る」　昨今の結婚式についてカスタマー傾向を探る。グループ内で意見を出し合う。
第４回　「傾向分析」　グループ内でカスタマー傾向を分析する。
第５回　「着眼点の設定」　分析結果から、グループ毎に着眼点を設定する。
第６回　「『コンセプト＝大切にしたいこと』を決定」　着眼点を基にブレインストーミングにてコンセプトを決める。
第７回　「アイデア創出」　設定された着眼点を基にブレインストーミングにてアイデアを出し合う。
第８回　「具現化、試作」　プロトタイプ制作、仮発表と再プロトタイプ。
第９～12回　「発表準備」　まとめの作業、パワーポイントに頼らない発表ツールを作成。
第13回　「発表リハーサル」　リハーサルでの不具合を調整する。
第14回　「発表プレゼンテーション」　グループ毎にプレゼンテーション。
第15回　「まとめ」　プレゼンテーションの感想と反省、他のグループとの意見交換。

３．授業報告

3-1.　イントロダクション　授業の進め方の説明

履修者18名に対し、授業概要について下記３点の説明を行った。

1）新しい発想の結婚式プランを企画するにあたり、注意点を説明。
2）自分たちの発想をより良くすることにつながる「デザインの学び」を取入れることの重要性を説明。
3）授業の進め方、最終ゴール、注意事項などの周知。
グループに分かれてからは、前回のおさらいをしてからワークを進め、最後にその日の振り返りをして、グループ内での情報共有を徹底させる。

過年度の授業では、インターネットにてアイデアの基になる情報を検索して結婚式の企画を行っていたが、新しい発想が生まれないことが課題であった。ネット上に溢れている情報は、既に実施されている結婚式か、これから実施予定のアイデアであり、これでは既存のアイデアの組み立てでしかない。１年次からブライダルについて学んできてはいるが、自分の考えを明

確に表現し、具体化する経験は乏しい。そこで、コンセプト、テーマ、演出アイデアについて、ネット検索を禁止し、グループワークにおけるブレインストーミングでアイデアを出すことにした。アイデアを創造し、具体化するためのフレームワークとしてデザインの学びを取り入れ、表現することに重点を置いた授業を実施した。

デザインの学びを取り入れた授業「ブライダルコーディネート」との連携は、当該授業で企画されたプランをブラッシュアップすることを目的とする。プロトタイプでアイデアを形にし、コーディネートの授業で発表、課題を見つけ出し、修正を加えていく。結婚式の企画をより良いものにするために、デザインの学びにおけるステップが重要であることを説明した。

14回目の授業でプレゼンテーションを実施し、審査員と受講生による審査の結果で、後期に実演する結婚式プランを決定する。

3-2.　発表へのモチベーションを上げる

過年度に実施した模擬結婚式の映像を鑑賞し、自分たちが企画する結婚式を具現化する喜びを想像してもらうことで、学生たちのモチベーションが上がる。また、過年度のプレゼンテーションの映像を観て、発表のイメージをつかんでもらった。

履修者は18名で、プレゼンテーションに向けて５つのグループを作る。それぞれにリーダーと記録係を決める。記録係は、グループのメンバーの行動や発言を記録して、メンバーと共有できるようにし、ワークシートへも記入して提出してもらう。これにより、グループ内における責任感を自覚してもらい、発言機会を増やすことが期待できる。

3-3.　結婚式事情を探る

本来、カスタマーにインタビューしてニーズを掘り出し、共感することは、デザインの学びのステップとして重要であるが、実際に結婚予定のカップルにインタビューすることは困難である。そこで、昨今の結婚式について、リクルートで調査を実施し発表している「ゼクシィ結婚トレンド調査」を読み解き、カスタマー傾向を探ることにした。他に、紙媒体の『ゼクシィ』を参考にして、結婚式場ではどのようなプランを販売しているのか分析する。それぞれのグループ内でブレインストーミングにて意見を出し合い、まとめる。

3-4.　傾向分析

グループ内でカスタマー傾向を分析する。

カスタマーへのインタビューができないため、結婚式を実施したカスタマーに対して調査を行った「ゼクシィ結婚トレンド調査」の結果から、潜在ニーズや新郎新婦の気持ちを考え、何が求められているのか分析し、意見を出し合う。

カスタマー傾向の分析結果が、結婚式のコンセプトを決定する上で重要であることから、丁寧に話し合い、少数意見であっても蔑ろにしないようアドバイスした。

3-5.　着眼点の設定

分析結果から、グループ毎に着眼点を設定し、そこからコンセプトの決定につなげたい。着眼点を設定することが難しいと感じている学生も多かったことから、「着眼点＝花嫁（みんな）は結婚式でこんなことができると嬉しい！」と簡単な表現に置き換えて議論を進めさせた。

現在の結婚式事情やカスタマー傾向を分析することで、新郎新婦が何を望んでいるのか、様々な意見が出された。授業の振り返りをする中で、これらの意見を集約して着眼点を設定させ、次回授業でのコンセプト決定に繋がることを説明した。

3-6.　「コンセプト＝大切にしたいこと」を決定

着眼点を基にブレインストーミングにてコンセプトを決定する。

グループで設定した着眼点についておさらいをしながら、「結婚式で大切にしたいこと」がすなわち「コンセプト」であることを説明した。コンセプトを導き出すと同時に、なぜそれが大切なのか、その理由と背景を考えることが重要である。理由と背景が明確であれば、それを基に演出アイデアの意味づけができる。結婚式における行為の重要性と込められた意味を基に新しいアイデアを生み出しやすくなり、コンセプトに合わせたアイデアを創出することに繋がると期待できる。さらに、その企画の商品価値は何か、アイデアとコンセプトの関係性を明確にし、この結婚式では、誰がどのように嬉しいのかを具体的に考えさせた。

前回授業のおさらいとして、ワークシートに花嫁が結婚式でできると嬉しいこと、それができると花嫁以外に誰が喜ぶのかを記入し、その日の振り返り、まとめとして、自分たちが結婚式で大切にしたいこととその理由・背景を記入させ、コンセプトが決定した。

難しい説明ではなく、理解しやすい言葉を使用しての説明を心掛けることで、話し合いが進み、多くの意見が出ていた。

3-7.　アイデア創出

設定された着眼点を基にブレインストーミングにてアイデアを出し合う。

ワークシートに従って、前回授業で決定したコンセプトを基に、どのような場面（場所）で、どのようなアイテムを使い、どのような演出をするのか、アイデアを出し、それをまとめる。

その結果でテーマを導き出し、ワークシートに記入した内容で結婚式を組み立てる。仮の段階ではあるが、結婚式の大枠が決まった。

沢山の意見が出ることは理想的であるが、どの意見を尊重するか、どこに重点を置くかの意見が分かれるところで意見を集約するのは難しく、それを実感したようである。

3-8.　具現化、試作

並行して行われている「ブライダルコーディネート」の授業を利用して、結婚式の企画内容をブラッシュアップさせるため、アイデアを集約した結婚式の流れをプロトタイプとして仮発表する。他のグループのメンバーに意見や感想を出してもらうことで課題を発見し、解決策を

考えて改善することを目的としている。

ここで問題となったのは、プレゼンテーションの当日まで、他のグループに企画を知られたくないという意見が大半を占めたことである。プレゼンテーションはコンペティション形式で、最も評価の高かったグループの企画を採用して、後期の授業で実際に模擬結婚式を実施する。選ばれたいという気持ちが強く働き、当日まで企画内容を知られたくないと考えてしまったようだ。企画内容をブラッシュアップさせるためには、第三者の意見を聞くこと、他グループの発表から学ぶことは貴重な機会であるが、競争意識が強く働き、学生からの反発を招いてしまった。

その結果、他のグループから意見を出してもらうのではなく、デザインの学びを担当する教員３名で意見や感想を伝え、改善させることにした。

3-9.　発表準備、まとめの作業

パワーポイントに頼らない発表ツールを作成させ、発表の準備をする。手作業となるため、準備時間として４時限分を当てた。100円ショップで手に入るような材料を使用し、結婚式で使用するアイテムを作ったり、ロール紙に手書きで結婚式全体の流れを提示したり、様々なアイデアを表現することに時間を割いた。

プレゼンテーションには、学外から審査員が３名、学内の審査員１名が出席することを伝え、評価シートに基づき評価ポイントを説明した。審査員の前で、いかに自分達の企画を魅力的に提示できるかが問われるため、どのグループも試行錯誤しながら発表資料を準備していた。手作りの発表ツールということもあり、４回分の授業では完成させることはできず、リハーサルに間に合わせるため時間外にも集まって作業した。

3-10.　発表リハーサル

リハーサルすることで問題点を見つけ出し、不具合を調整する。

パワーポイントを使用せずプレゼンテーションを実施させることで自分たちらしい表現方法の発見につながり、発案した企画の見える化が可能となるだけでなく、自分たちの企画内容に自信を持って発表することができるようになるはずである。その結果、発表態度に好影響を及ぼすことが期待できる。

リハーサルの段階では、どのグループも発表ツールを活かしきれず、企画内容の魅力がほとんど伝わらなかった。発表の際は原稿を読むだけで、説得力も窺えない。もう一度、自分たちのコンセプトを再確認し、何を大切にしているのか、演出やアイテム、行為にはどのような意味が込められているのかを話し合うように伝えた。一人ひとりがしっかり理解していなければ、人に説明することはできない。プレゼンテーション本番までに、原稿に頼らず自信を持って発表できるように宿題を課した。

3-11.　発表プレゼンテーション

グループ毎にプレゼンテーションを実施する。１年間学んできたことをベースに、結婚式における演出や行為の意味を深く理解した上で、新しい発想の結婚式を企画させる試みは、学生たちにとって学びの深化に繋がり、これまでにない、オリジナリティのある企画が生まれると期待している。

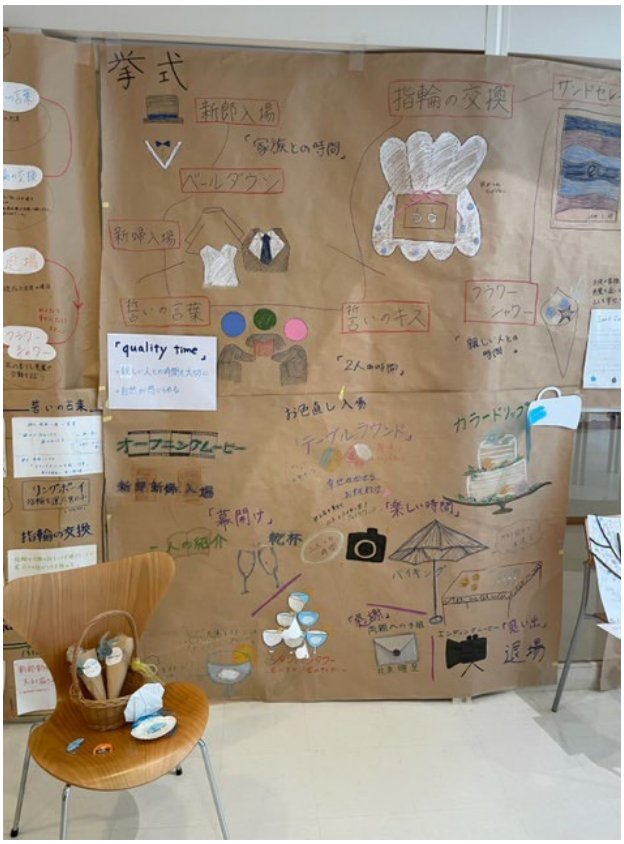

図２　プレゼンテーション発表ツール　ロール紙

パワーポイントを使用せずプレゼンテーションを実施させることで自分たちらしい表現方法の発見につながり、発案した企画の見える化が可能となるだけでなく、自分たちの企画内容に自信を持って発表することができるようになり、発表態度に好影響を及ぼすことも同時に期待できる。

結婚式についての専門的知見を加えることを目的として、学外審査員は、ブライダルコーディネーター２名と婚活支援従事者１名を招き、専門的視点での審査をお願いした。また、一般的な視点での評価を期待して、結婚式を専門としない学内の教員１名に審査員を依頼した。学生にも評価シートを配布して、相互評価するようにした。

発表は１グループ10分＋質疑応答２分である。各グループの企画は以下の通りである。

・グループ　華　「キャンディング　～主役・一体化・ENJOY～」
・グループ　The ケーキ　「ガーデンウェディング」
・グループ　シーパラダイス　「ハマチくんとイクラちゃんの結婚式」
・グループ　Blue Oceans　「Quality Time」
・グループ　ぶるーむ　「魔女の宅急便」

それぞれのグループが、ユニークな提案となり、後期授業での模擬結婚式に留まらず、実際の婚礼会場で販売できそうな企画もいくつかあった。カスタマーのニーズを掘り出し、新郎新

婦の気持ちに寄り添い、さらには列席者の気持ちまで考えられた提案となっている。

リハーサルの時より格段に発表態度も改善され、手作りの発表ツールを活かして自信を持って発表していた。

これは、学生が自らの考えを「組み立て」「まとめ」「表現」する本学の「デザインの学び」の成果によるところが大きいと考える。

一方で、実現性に問題があったり、実施場所の設定があいまいだったり、完成度に隔たりがあったが、人前で発表することでこれまでの学びの深化に繋がり、学生たちにとっては貴重な経験の場となった。

3-12.　まとめ

最後の授業では、プレゼンテーションの結果を受けて、グループ毎に審査員の評価や感想を共有した。ほとんどが高い評価をしてくれている一方で、厳しい意見もあったが、それも含めて納得している様子が窺えた。また、自分たちのグループの発表に関する感想と反省、他のグループに対する感想や意見を出し合った。

後期の「ウェディングプロデュースⅡ」では、模擬結婚式を実施する。選ばれたグループを中心に実現に向けて準備を進めていく。

４．成果と課題

4-1.　成果

「知る・行う」を編み合わせる学びから、自分たちの社会を自分たちで「表現し・構想し・具現化（実践化）する」人材の育成をするため、表現する（行う）力と説明する（知る）力を編み合わせる教育、「デザインの学び」を取り入れる試みを行った。アイデアを想像し、具体化するために必要な手順のフレームワークとして、自分たちの考えをまとめ、アイデアを形にする場面において、結婚式で行われている演出や行為の意味と、コンセプトとの関係性を考えさせることで、新しい発想が生まれた。多くの意見を集約してそれを形にして表現するという授業の目的は達成されたといえる。授業最後に行った意見交換と課題レポートからは、「結婚式にどんな工夫があったら面白いか、楽しんでもらえるか、自分の意見も相手の意見も尊重し合い、たくさんのアイデアを出せたし、グループ活動の大切さを改めて感じることができた」、「手書きで考えたことで、今まで理解しきれていなかった結婚式の流れが頭の中ですぐ思い浮かべることができるくらい理解できた」、「ブライダルがデザインと関係していることを知った。結婚式の流れが同じでも、その表し方はそれぞれ違い、いろいろなデザインを表現することができた」、「グループでの話し合いに苦戦することもあったが、考えていくうちに、自分達にしか表現することができない結婚式の流れを作り上げることができた」、「着眼点を設定したことで新しい発見もあったし、最初から最後まで自分達で考えたので、人に説明することが全く難しくなく、質問にもすぐ答えることができた」、「結婚式の演出や行為の意味まで知ると流れもつかみやすく、楽しく取り組むことができた」、「今までより挙式のことを深く知ることができたし、

演出の意味合いも再確認することができ、結婚式を一から企画する際に役立った」といった感想が寄せられた。感想からは、「知る」学びと「行う（表現する）」学びの編み合わせにより学修成果が得られたことが確認できる。

グループワークの重要性と難しさを知り、話し合いによってアイデアがまとまったことへの達成感、アイデアを自分達なりの方法で表現することができたことへの充実感、結婚式についての知識の深化が確認できた。何よりも、学生が自身の成長を感じることができたことは成果といえる。

図３　プレゼンテーション発表ツール　パネルシアター

デザインの学びの目的を達成するには、手作りの発表ツールを使用することが必要と考え、表現することを重視するため、プレゼンテーションではパワーポイントの使用を禁止した。その結果、それぞれのグループで工夫を凝らした発表ツールを作成し、発表方法にも個性が表れた。大きなロール紙にイラストを描き、結婚式の流れをわかりやすく表現したグループがある一方、段ボールを利用して結婚式を実施する場所と新郎新婦、列席者の人形を作り、パネルシアターで説明するグループもあった。また、結婚式の招待状を実際に作成して配布したり、演出を実演したり、まさに表現することを学んだといえる。審査員の評価としては、「パネルシアターでの説明がとてもわかりやすかった」、「イベントの意味づけがとても魅力的だった」、「結婚式で実際に使う小物が用意されていたのでイメージが伝わった」「自分たちにはない発想で素晴らしいと思った」、「プレゼン一人ひとりの役割がしっかりしていてわかりやすかった」、「着眼点が素晴らしく、驚いた」、「世界観がおもしろく統一感があった」など、発想力や表現力を高く評価していることがわかる。

昨年度のプレゼンテーションにおいては、発表態度や内容について最高評価をつけた審査員はほとんど見受けられなかったが、今年度は、最高評価をつけた項目が増えていることから、デザインの学びを取入れた授業の目的を達成したといえよう。

4-2.　課題

デザインの学びにおいては、プロトタイピング→テスト→課題発見・ひらめき→改善→再プロトタイピング、というプロセスは重要であるが、学生たちの反発を招いて効果的に実施することができなかった。プレゼンテーションがコンペティション形式ということが先走りして、発表本番当日まで自分達の企画を知られたくないという競争心を煽ってしまったようである。授業のイントロダクションにおいて、デザインの学びについての説明が不足していた。カスタ

マーに見立てた他のグループのメンバーにテストすることは、自分達の企画をブラッシュアップさせることに繋がる上、他のグループのテストからはより良いアイデアのヒントを得られる可能性があることを丁寧に説明すべきであった。

プレゼンテーションを実施する教室を確保することは、より良い結果を得るために必要であると感じた。今年度は適切な教室を確保することができず、学生たちが製作した発表ツールやアイテムが見えにくく、学生から「パワーポイントで写真を使ったプレゼンテーションの方が見やすかったかもしれない」という意見もあった。

また、IT機器の不具合が発生し、教室全体をプラネタリウムのように星空を映写するアイデアが実施できなかったことも残念であった。審査員からは「機器の不具合のせいなのか、練習不足なのか……」というコメントがあったことからも、評価に影響があったことが窺える。教室環境がプレゼンテーションに影響を及ぼすことから、来年度は、適切な教室を確保することが重要であろう。

５．おわりに

本学のデザインの学びの特徴のひとつに、「『わかったことをやってみる』や『やってみることでわかる』体験から、学び手が自分で『問い』を立て、考え、形あるものごとにつくりあげる力を獲得する」ことがあげられる（三菱みらい育成財団）。本研究におけるブライダル科目にデザインの学びを取り入れる試みは、いくつかの課題はあるものの、やってみることでわかるという体験をし、形あるものごとに作り上げたという点で目的を達成できたといえる。結婚式を企画する上で必要な発想力や、カスタマーのニーズをくみ取り、そこからアイデアを創出して形にする力は、「デザインの学び」によって養えることを確認することができた。グループワークでのコミュニケーション力や様々な意見を集約する力を養う方法としても優れており、様々な分野の学びに適用できる。何より、学生自身が成長を感じる学びとなっていることもわかった。

本研究で得られた課題点を改善し、今後も継続してデザインの学びを取り入れた教育を続けていきたい。

【参考文献】

岡瑞起，田村大，堀井秀之　「デザイン思考に基づいたイノベーション教育：北米の最新動向」『情報処理』Vol.50, No.12, 2009年, pp.1222-1227.

徳田明仁　「デザイン思考に基づく授業づくりに関する考察」愛媛大学教育学部紀要Vol.61, 2014, pp.213-223.

橋本順一　「『デザイン思考』を取り入れた授業実践報告」玉川大学芸術学部研究紀要, 2014, pp.85-91.

三菱みらい育成財団ホームページ，2023年度助成事業，
https://www.mmfe.or.jp/partners/?y=2023【最終閲覧日2023年9月29日】.